

東京白楊だより

第12号
元. 9.20

〈東京支部を活力ある集いに〉 …………… 支部長 篠田 作 衛
第13回親睦大会 …………… 特別講演 早坂 茂 三
昭和天皇をお偲びし …………… 元宮内庁長官 富田 朝 彦
日本将棋連盟会長二上九段の人となり
愛校心と野球に燃えた男 〔沼沢 康一郎〕



函中100周年にむけての人文字（平成元年4月撮影）



白楊ヶ丘同窓会東京支部

旧制函館中学校
函館中部高等学校

二 挨拶

東京支部長 篠田 作衛



「東京白楊だより」も回を重ねて、茲に第十二号を数えるに至りました。干支でいえばひと回りが巡った訳で、それだけ当支部の歴史も深まったように実感されて、誠に同慶に堪えません。こゝまで来れば何となく安心といった気持ちで湧いて参ります。会報ご担当の役員の方々、ご苦労さまでした。

会員の皆さま、ご健勝でご活躍のようす真に嬉しい限りに存じます。これから、時折は母校のことなども思い浮かべながら、ご健闘を続けて下さい。

ご承知かとも思いますが、私、昨年の大会で当会の東京支部長に選任されました。碩学ご高名の先輩も数多くおられます中、大役を仰せつかって恐懼しております。浅学非才ながらお引き受けした以上、母校と会員の皆さまに少しでもお役に立ちたく、微力を傾けたいと決意しています。宜しくご鞭撻ご交誼下さい。

さて、母校の同窓会とは、私達にとって、一体何なのでありましょうか。様々な見方もある中、私は、会員各位の「精神のフランチヤイズ」であると共に、

「心の故郷、或いは魂のオアシス」といった風なものと理解しています。

私達は、たまさか道南の一隅に生れ、或いは青春のひとときをそこで過し、そして志を抱いて東京周辺に住みついた訳ですが、ふと我に返って精神形成の生い立ちを問うとき、明確にそのアイデンティティを保証し、同時に懐旧の安らぎを与えて呉れるのが母校「白楊ヶ丘」であり、今「仲間はいないか」と叫ぶとき、「こゝだ」と答えて呉れるのが「東京支部」であるように思います。少なくともそういった温かい絆が基底にあるべきだと痛感致します。

懐かしいわが函館弁の一つに「あずま

心のオアシス

東京支部を活力ある集りに

しい」と言う言葉がありますが、この感じこそが同窓会のあるべき姿を象徴して妙なるように思われてなりません。そして当支部にとっても、様々な展開が期待される中で、あずましい物心の環境を作り上げることが至上課題であります。皆さま、何かと交流を活発にして頂きたいとは念じますが、終始あずましい雰囲気でありませう併せて切望する次第です。

ところでわが東京支部には、更に加えて幾つかの課題が潜むように思います。第一に、当支部は首都をバックとして

いる以上、恐らく他支部よりも更に多くの会員を擁し、質的にも多様な卒業生を抱えていること必定です。当支部は、こ

の大集団とライアティに対しても充分な連絡機能と求心力を持ち、会員に憩いと活性を与える有機体でなければなりません。

第二に、東京は一面、物質文明の最先端をゆく冷たい無機質の世界であり、又能率至上主義のビジネスと冷酷な契約の社会であります。ところがここに住む私達は、潜在的にこの東京の本質を忌避し、時折、その対極にある、より情緒的、超論理的なものを求めることがあるのを否定できません。

これが又東京では殊更に同窓会が盛んである一因でもありましようが、わが東京支部、そういった真のパトスの要請に

充分応えることが出来るかどうか、これがもう一つの課題に思われます。更に第三に、東京に限りませんが、支部も又母校と共にいつ迄も若くありたいという宿願の課題があります。

白楊ヶ丘のわが母校は、今や百年の伝統をもつ由緒ゆかしい名門ですが、なお毎年優秀な卒業生を輩出して旺盛な細胞分裂を続ける活性体であります。従って、

支部も又これに呼応した活力を示さなければ生命を失います。私達も是非毎年斬新さを増し、活潑に躍動する生命体でありたい訳です。換言すれば、OBの会とはいえず、東京人らしくナウく、ビビットにいこうというのが私達の願いであり

ます。

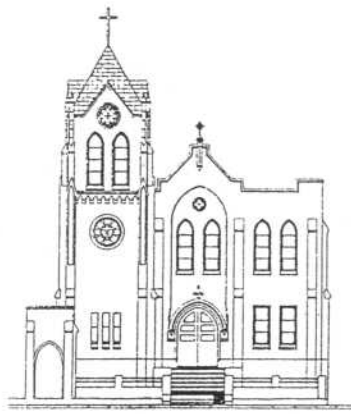
では、以上のような当支部のかかえる課題に対し如何に対応すべきでしょうか。先に私なりの結論を申しあげます。極めて平凡ですが、支部規約に謳っている下記目的に向い、敢然、実現を図ることに尽きるように思います。

- 一、本部と他支部との連絡を密にする
 - 二、会員相互の親睦と融和をはかる
 - 三、母校の精神発揚と発展に寄与する
- では更に、この理念、目的を実現するためにには実際に何をどうすればいいのか。私は、これに対しても又甚だ地道ながら、次のような手近かにして容易な方途を着実に実行してゆくことだろうと見定めました。つまり、

- 一、役員を会則に則って的確に定めその役割も出来るだけ明確にする
- 二、役員会と大会を所定の通り開催し、忌憚のない話し合いと明るい雰囲気の中から方針を明確に打ち出してゆく
- 三、大会の開催に加え、会報、名簿、組織の整備、母校への協力、行事の開催といった事業を遅滞なく展開してゆく

等々のことができれば、それなりに目的達成へのアプローチが期待できるように思います。

嬉しいかな、伝統あるわが東京支部には、誠に適材と思われる役員諸氏が数多くおられて、この理念実現のために既に活躍を続けておられます。又事情やむを得ず辞退を希望された役員の後には、適任者をお願いして新しく役員をお引き受け頂きました。従ってこの方々の献身的



メソジスト函館教会

新役員紹介

去る七月七日の評議員会において次のとおり副支部長の追加選任が承認されました。

副支部長 井筒 吉彦 (43期)
 副支部長 三國 比左男 (51期)
 副支部長 高橋 良一 (52期)
 副支部長 荒井 浩 (62期)

白楊ヶ丘同窓会東京支部 第十二回親睦大会

65期 菅原 大作

な活躍と会員皆さまとのチームワークが続くならば、先ほどの課題達成もできることと信じます。現にそういったムードの醸成されているのを実感いたします。この雰囲気のおかげで私どもが腐心しておりますのは新会員の発掘の問題です。折角東京周辺におられても未だ本会に参加しておられない方がかなりの数に及ぶようす、是非お誘い下さい。双手をあげて歓迎申し上げます。

白楊ヶ丘同窓会東京支部が実施する最も大きな行事である「第十二回親睦大会」が、昭和六十三年十一月二十四日(木)午後六時より、東京・港区の「東京青山会館」で、来賓及び同窓生、約百七十人が参加して賑やかに行われた。

大会は、第七十五期・桑原洋子さんの司会のもとに始められ、最初に第六十九期・高木隆氏が「この親睦大会で、わが母校・函館中部高校の一層の発展と同窓同志の交友と交流の場として懇親を深めたい」と開会を宣言した。次いで、全員で同窓会歌(函館中学校校歌「玄冥の北の道……」)を合唱、大会の雰囲気盛り上げた。

この後、支部長の第四十五期・池田和行氏が、「母校が新制となって、もうすぐ四十年になろうとしている。同窓会には年々若い力が増えてきており、毎年大会でも、女性を含め若い人達の参加者が増えつつある。今後ともこうした流れを定着させると同時に、旧制・新制の別なく母校並びに東京支部の発展に一層努力して欲しい」と挨拶した。次に、来賓として出席した函館中部高校の大沢校長は「中部の伝統である文武両道を目指した生徒指導を行って、文の部では大学進学率も高い。しかし、運動部の活躍は今一つといった状態である。また、校舎の



老朽化により全面的な立て替えの必要に迫られているが、敷地面積が不足しており、移転計画もある。しかし、校舎の高層化等により、現在の場所での新築計画を進めている。この一環として旧体育館の取り壊しが近々始まる予定となっている。」と母校の現状について述べた。また同じく来賓として出席した同窓会函館本部代表の奥平忠士氏(第五十六期)は「母校は、まもなく創立百周年を迎える。その記念事業を同窓会として模索中であるが、記念事業が決定した際には東京支部においても百周年事業に対する協力をお願いしたい」と挨拶を行った。

この後、第五十六期・黒川陸郎氏が今回の親睦大会実施に至るまでの経緯について述べた後、第三十七期加藤孝一郎氏の発声により乾杯、開宴した。

そして、抽選会終了後、函館中部高校校歌「火柱のはためく峰も……」を全員で斉唱、さらに第三十期小畑文雄氏の音頭で「母校及び東京支部の一層の発展、会員の健康を祈願して」万歳三唱した。最後に、第五十七期・野村実氏が「次の再会を期待したい」と、閉会のあいさつ。午後九時過ぎ、盛況裡のうちに終了した。

昭和 63 年度東京支部会計決算書

収入の部		支出の部	
前年度繰越	580,268	総会費	1,304,865
総会費(169名)	1,183,000	会報印刷費	283,120
年会費(708名)	1,416,000	理事会務費	301,290
利息	10,911	会費	288,277
雑収入	40,000	雑費	145,125
		立金	400,000
		繰越	507,502
計	3,230,179	次年度繰越	3,230,179

昭和四十九年秋、宮内庁に移り十四年間、昭和天皇にお仕えした。昭和三十三年春、別府志高湖畔での植樹祭に行幸啓された両陛下に、当時大分県警本部長として終始お側に在ったのが陛下にお仕えした最初であった。高崎山では、子猿が皇后様のお肩に飛び移りお顔拝見の様子に微笑を交わされておいでのお姿、日豊本線で宮崎までお送りした車中お召しがあり『この度は色々とお苦勞でした』と真近にお声を頂いたその暖いお眼が忘れられない。

四十九年仲秋、官房長官から今度はお側にとの話があり、大分以来遠くで拝見することはあってもお側には予想もしなかった丈にどうするかと迷った。人事については拘ることをせずを信條として来た私も『五日のご猶予を』と願った。そして昭和の五十年に亘る展開と推移を顧み、読み古した歴史的や政治史の書を読み耽り、そこに『歴史の重みに耐え国民と共に歩む』昭和天皇の有難い御姿を拝察した。その上で心を決して坂下門を潜ったのである。

陛下は、七十五才を越えられた頃で元気一杯、時に鋭い光を拝するお眼に人をいつくしむ柔い光を湛えられているのが常だった。

今夏の学士会会報に、福田元総理が『昭和天皇のヨーロッパ旅行に随行して』を寄せておられる。天皇が日本を離れ外国の土を踏まれるのは史上初めてのことである上、第二次大戦の記憶を残す欧州に、深いお心を秘められつつ堂々と旅された。『ベルギーでは現地紙が、日本の天皇二日間ベルギーを占領』と大々的に

報じる程の関心を集めたものです。ご訪欧は、日本の存在を大きくP・Rし、日本への認識を高める大きな役割を果たされたのです』と。非公式御訪問の佛国で『パリではフォンブロー宮殿の庭を散歩されました。たまたまその日は日曜日でしたが、宮殿にはきれいな池があり、その池のほとりにお立ちになり、鯉に餌を投じている時でした。普段はたくさん出てくる鯉がちっとも出てこなかったのです。即座に陛下は『そのうちにディマンシュー（日曜の意の佛語でもある）と申されました。その帰りに食事をされたの

昭和天皇をお偲びし 平成を想う

40期 富田朝彦

ですが、その時出されたエスカルゴの殻を持ち帰るよう侍従に命ぜられました。そこでいくつ持ち帰りましょうかと申し上げたところ『さんこ』と云われたので三個包んでもらおうとしたら『君運うよ、サンク（五個の意）だよ』と仰せられた』と記しているが、陛下の飾らないユーモアとウィットがよく盡されている。こうした陛下を中心に、灰の中から立ち上った日本国民が宮々と築き上げて三十年、新しい国際舞台が広がった。両陛下を米国にお迎えし日米の固い絆を締め直したフォード大統領がそれに先

立つ昭和四十九年秋来日し、英エリザベス二世陛下（五〇・五）、鄧小平中国現党中央軍委員長（五三・一〇）、ミッテラン佛大統領（五七・四）、全韓国大統領（五九・九）等各国首脳が相繼ぎ、この間陛下はご接遇に随分と心を砕かれた。六十一年十一月には、混乱の中から誕生間もないアキノ比大統領を迎えられた。大統領は『俳句をつくりました』と差出され、亦記者会見で『陛下はご親切で偉大で、やさしかった私の父を思い出しました』と語った。お別れ訪問で迎賓館に向かれ随員達とも言葉を交わされ

た。特に、大統領の一人息子ベニグノ・C・アキノ三世に『大統領も色々とお苦勞が多いと思うが、どうかお母さんを助けてフィリッピンの繁栄のため努めて下さい』と声をかけられ、大統領も『大変いい息子で』と母の顔に返ってお礼を云う場面があり、お側にいて私共も思わず目頭が熱くなった。『国際国家』として大きく育ちつつある日本は、厚みを増す一面、本末を失ってはならない試練にこれからも多く遭遇するであろう。これを一つ一つ克服してゆくと思いたい。

昭和六十二年新春の歌会始に、大御歌としてこう詠まれた。

わが国のたちなおり来し年々に
あけぼのすぎの木のはのびにけり
と、国民と共に今日を迎え、明日の日本もかくあれかしとの御感懐を拝するのも感銘盡きぬ。

皇室は、日本民族と古来よりの継続の中に存する。平成の新時代は未来に向けて力強く歩み始めた。新陛下は英邁の御資質を充分に継承なされ、御成婚以来三十年皇后陛下と、この国・国民を見詰めてこられ、又四十国余に上る国を歴訪され日本への認識を高めてこられました。ひとえに万邦平和の中、日本国民の幸せを願うの深いお心を思い、夫々が万分の一にもお応えしお盡したいものであります。

先帝陛下は、御不例の一昨秋、秋なかば国のつとめを東宮にゆずりてからだ やすめけるかなと、御心安らかに頼むぞとの仰せであった。そのお心を偲び、平成の今を考えている昨今である。

（元宮内庁長官）



カトリック元町教会



四人組始末記

52期 二上 達也

四人組と言えば中国文化大革命期における一派を思い出したりするであろうが、麻雀は四人組だし、ゴルフも四人でプレーをする。

我が東京玄羊会においては、竹沢、福津、小泉、そして小生が四人組に相当するのだろうか。青柳小学校出身とか名前のイニシアルが全員Tであるとかの共通点(崇・達男・龍彦・達也)が何やら特別な連帯感をもたらすわけであるが、だからと言って、いわくあり気な派閥を形成しているつもりは毛頭ない。

竹沢は仕事柄、朝は早いが夕刻早目に時間が空く。小生は自由業の気安さで都合がつけやすい。

福津の事務所が丁度新宿に近く、夜の巷に出撃する間の停泊地に最適とあってはたまらない。

釧路から金曾が出てきた。函館から田中が、さらに札幌から誰れそれがなどと言う場合は直ちに召集がかかる。

常に連絡先は福津事務所集中、佐藤

信ちゃん先生を筆頭に、中村勝哉、吉田信一あたり出席率が高い。

その中でも特に多いのが前述の四人組になる。目的の為の目的と言うのか何かと理由をつけては顔合せをする。

お互い先輩となつて、そろそろ自粛しようかの談合も常にハナシだけで終わってしまうのが現状である。

我々昭和一桁世代は特殊な存在だと言われる。しかし、これほど共通体験の一致する世代は他にないから集まるだけで通じ合えるものを持っている。

ポツリポツリ欠けて行くメンバーを見

日本将棋連盟会長

二上九段の人となり

るのは淋しい限りであるが、竹内のように本業をリタイアして将棋プロに転向するなど増々盛ん、意気軒昂なのは心強い。

小泉も札幌に新天地を得て活躍中、自然に四人組は欠員状態になっている。そこはそれ或る意味では自肅目的に合致する面がなきにしもあらずである。

確かに当面は福津、小泉の名コンビが見られないが、札幌で玄羊会四十周年大会の開催が近い所、彼に期待する声も大である。

さて私事で恐縮、この度将棋連盟会長なる大層な役職を与えられ戸惑う日々。



元々何にもセンム(専務理事)であったのだから、地で行けば良いと思いきや意外に忙しい。

知らずにかゝるストレスの解消には玄羊会が何よりである。

時期を失して申し訳ないが小生を励ます会に直接集合の諸兄諸氏はもとより、御好意を寄せて下さった皆様へは、この紙面をお借りして重々御礼申し上げます。

小生のズボラさ加減は同窓のよしみにて甘えさせて載く次第である。

一步値千金



13年続いた大山時代から個性豊かな勝負師の集団を束ねる将棋界の新しい顔になった。

会長になったら出来るだけ自分は動かない様にすると言いながら、理事全員切り替え若い人達の活躍出来る道をつくった素早い対処、経営、管理者としてなかなかのものとみた。

静かな物腰に人をみぬく鋭さは、往年の迫力ある攻め将棋を思わせる。

趣味はゴルフ、碁、カラオケ、小唄と幅広い。酒は強く常に乱れる事なく酔う程に品が良くなる。

巷では愛称『ガミさん』で通っている。なじみの飲み屋は数知れず『ドレスデン』『ポトス』『萌ぎ』『ヴェック』『紫野』等、萬遍なく廻る。

為に夕方6時から朝の2時迄かかる。

そして、マイク二上の異名の通り歌い続ける。又、どんな歌も一度彼の体内に吸収されると不思議と甘い歌声になって吐き出される。

いわゆる独得の二上節である。一度会えば全ての人が彼の徳と歌に魅了される。

色紙には一步千金、不動心とかく。函中時代からの悪友数名に二上の人柄を書いて貰った。(F)

共に将棋の道を歩む者として

Ⅱ 二上達也君との出会い Ⅱ

52期 竹内 巖太郎

古いロマンの街函館を今でも市電が走っている。今では赤字に悩む公営都市交通企業であるが、重要な市民の足である事は当時も今も変わらない。

その市電の停留所に中央病院前という所があり、その停留所界隈を本町と呼んでいる。その本町に二上と小生の中学生当時の生家があった。

また隣接する時任町に母校の校舎があり、三年先輩の小笠原達雄氏（現北海道将棋連盟理事長・釧路市在住）もその時任町に住居があった。

太平洋戦争の終戦は二年生の時であり、同級・同期生の多くは空腹をかゝえながらも懸命に学業に励むようになったが、二人は『将棋』という不思議な魅力を伴った世界にひきこまれて、住居が目と鼻の近くであった関係もあって、学校から帰るとカバンをほうり出して毎日のように将棋を指すようになり、めきめきと腕を上げていった。

また、この付近には前記の小笠原氏（アマ六段）をはじめ、阿部賢郎アマ五段（小樽市在住・当時函生）古関三雄詰将棋作家（札幌市在住・当時函生）などもおり盛んに交流しあったものだ。

二上君の棋才が一頭地を抜いていたものであったことは確かだが、それを育てる土壌が本町界隈にあったのかも知れないと、今なつかしく思い出している。

やがてより以上の上達を求めて、音羽町にあった将棋会所（故白土誠太郎七段経営）に通うようになり、高校卒業当時

には二上君の天才ぶりは、北海道アマ棋界に広く知られるようになった。

彼が専門棋界入りを決心したのは高校三年生の頃ではなかったかと思う。

当時の将棋界は現在のように世間に広く認められた世界ではなかったから彼も入門については相当に迷い悩んだとは思うが？白土誠太郎師は彼のたぐい稀な才能に注目して強く棋界入りを奨め、元プロ棋士でアマ名人にもなった島田永信氏（現七段・函館在住）も、氏自身の辛い体験からプロ入りを志す後輩の相談には容易に首をタテにふらない人であるが、彼の場合だけは無条件に賛成したと語っている。

その後の彼の活躍については広く世間の知る所であるので、ここでは記さない。

将棋界も我国の経済大国化につれて愛好者も着実に増加し、将棋四百年の歴史の中でも最も繁栄した時代を迎えたが、現在は一つの曲り角にさしかかったのではないかと観測も一部に行なわれるようになった。

趣味・レジャーの多様化にともない『将棋』が古典芸能化するのではないかとこの心配である。

今後の普及拡大の為に新会長の手腕に期待がよせられている。

小生も微力ながら将棋愛好者の一人として将棋発展のために、彼と今後歩みを共にするつもりである。

（アマ六段）

白楊の棋士

52期 穴戸 一人

この春、同期の竹内巖太郎君から、「多年に亘る教員生活に終止符を打って、余生を将棋愛好者育成の為に送る」という主旨の葉書を貰った。

竹内君の祖父は、竹内組（土木建築請負業）の創立者で、道南の業界では草分けでもあった。私の父はその門下で家も近かったから、かなり親しくはしていたものの、彼の将棋に就いては殆ど知るところはなかった。その竹内君から「同期生に将棋の天才がいる」と、半ば興奮気味に告げられたのが二上達也君の名である。

当時の二上君は小柄な方で、私のような腕白坊主から見れば、余り目立った少年ではなかったが、主筋に当る竹内君の評価を素直に受けとめて、畏敬の念を抱いたことも事実であった。当時の腕白坊主は実に単純で、天才秀才には生理的に弱かったのである。

竹内君に先んじて年金生活に入った同期生に佐藤義人君がいる。彼は同期生中随一の読書家であり、蔵書家でもある。中学時代から、妙に枯れた文章を得意としていた。

或る日、その彼から麻雀に誘われ、気軽に向いたところ、驚いたことに私を待ち受けていたのは、勝負の天才二上君と竹内君であった。

その頃の私は、こと麻雀に関してはか

なりの自負を持っていたのである。しかし乍ら天才を前にして、私は萎縮してしまつて手も震えがちであった。

それにも拘わらずその日は私の独り勝ちに終わってしまった。その時の優越感というものを御想像願いたいものである。後で知ったのであるが、その頃の二上君は、麻雀の覚え初めの習い立てであつたそうだ。

私どもの母校は、庁立函館中学校から、戦後は道立函館高校、そして函館中部高校と目まぐるしくその名を変えている。同じ校舎に六年間も同居するということは、小学校以来では稀有の経験である。終戦までの函中は、その敷地は白楊の巨木に囲まれていた。天空に聳える白楊は、杉とは異なって、多少の荒々しさのある樹木ではあるが、正に北海道を象徴する樹木である。

私どもの育英の場を『白楊ヶ丘』、そのスピリットを『白楊魂』と称した先輩に敬意を表するものである。

そんな意味から、二上達也君を白楊の棋士と命名したい。好漢切に自愛を祈る。



五稜郭

傲らず昂ぶりず

52期 福津 達男

昭和19年4月1日

第二次世界大戦の真只中、戦況厳しき折、庁立函館中学校に入学した。

一年一組、担任は上田先生（通称、蛸先生、ご健在の由、慶賀に堪えません）、級長は背高ノッポの吉見（代表で何時も撲られ、気の毒であった）、バスケの魚田（竹沢）、ラクビーの盛合、山内ダンゴ、ガラス屋の及能、ソロバン塾の久野、旭中に流れた村井半助、オナラをメロディに変える金曾、銭亀沢の秀才福沢ジャス（村で初めて函中に入ったというので、村長が赤飯で祝ってくれたという。残念ながら昭和56年肝腫瘍で死去）と異色な連中に加えて体格の良いのがゴロゴロしていた。中でも柔道二段の生駒とメッポー喧嘩の強い高橋ギヤング（他校生が彼を倒すのを目標にしていたので、常に生キズが絶えなかった）等はオソロシク、デッカク見えた。もっとも両君のお蔭で、我々は上級生にあまり撲られずにすんだ。

後日、高橋等数名で暁部隊の倉庫にカンパンをカップライに行った。見つかるかと銃殺である。現場に行ったら皆ガタガタ震えて、小便を漏らすのもいた。高橋だけが平気で、素手で木の囲いをバリバリ剥がし、カンパンをドサツと盗んで、皆に分配したことがある。

そんなモサ連中の級に二上がいた。小柄な彼は、一層小さく可憐に見えた。何か彼にはそぐわない別世界に迷い込んで

だようにさえ見えた。
この物静かな少年に、あの闘志あふれる棋士として、攻めて攻め抜くカミソリの二上九段として名を馳せるとは思いもよらなかった。

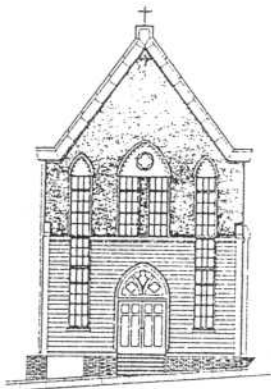
平成元年6月21日

新橋「浜辰」で32名の同期の仲間が集り、二上会長の祝賀会を行った。

あれから45年である。17歳で金道代表。高校卒業後すぐプロの道に入った彼は、まれにみるスピードで八段・九段となった。

大山を倒すのは二上しかいないといわれ、我々は二上が同期である事を誇りに、又、固有名詞として二上の期ですと挨拶がわりにした。一年先輩の「どんじり会」と同様に、新学制度切り変えのため、函中に6年間いた。それは最も春秋に富む時代でもあった。そのためか何かにつけて集り、よく飲む騒ぐ。

二上はよく「我々の同期会がうまくいくのは、幹事諸兄が一生懸命だから」というが、彼のような功なり名遂げても驕らず接してくれていることが、この会の一番の原動力となっていると思う。改めて心から感謝したい。



元町マリンハウス

細やかな気くばり

52期 佐藤 信

小生も、彼とはしばしば一緒に飲む機会があり、親しい付き合いをしているが、本来の仕事から離れた時の彼は、温厚篤実、大変穏やかな紳士であって、とてもプロの勝負師とは考えられないくらいである。彼が酒を愛し、ゴルフが上手で、カラオケも大得意である事は広く知られているが、歌の事で小生の印象に残っているエピソードがあるので、こゝに御披露したい。

今から四年前の昭和60年6月に、玄羊会は卒業35周年を記念して、箱根の湯本で同窓会大会を開いた。この時に今は故人となった同期のT兄が「風雪流れ旅」のメロディーに合わせて作詞した玄羊会歌、「誇れ、流転、玄羊会」を彼が同窓会会場で歌う事になった。この曲の歌詞は三番まであるのだが、リハーサルの時と違って、当日日本番の際、彼は一番だけで歌うのを止めてしまった。なぜそうしたのか、その時小生には判らなかつたが、後になって彼は、実は二番の歌詞の中に、この同窓会にお招きした恩師のお一人のニックネームが入っているので、その恩師を前にして、とても歌い続ける気になれなかつた。と話してくれた。このように相手に対する細やかな気くばりは彼の大きな特色の一つなのである。

今後、彼は日本将棋連盟の会長として、経営並びに将棋の普及指導の面で腕を振

るってゆくわけであるが、これからの活躍が大いに期待されるのである。

三十五周年大会玄羊会歌

作詞 瀧川 宏
歌 二上 達也

「台詞」 懐かしいなあ 想い出すなあ
紅顔のあの頃を

一、おさがりマントにゲートルまいて
黄線の帽子は 誇りなり
夢と希望に満ち満ちて
歩き通った千代ヶ岱
ヨイヤ ヨイヤ ポプラ、砂山、やませ風

二、一つ弁当二人で食べて
物がなくても心あり
ストープ囲むやロマンがはずみ
いつもオモチャに 皮肉られ
ヨイヤ ヨイヤ 遺愛、大谷、鷹立高女

「台詞」 三十五周年 みんな笑顔で逢えるかなあ
タコ、ポチ、ドンカン、元気がなあ

三、斃而不已は 男のちぎり
夏股周に栄枯あり
三十五年の 道異なれど
朋遠方より今ここに
ヨイヤ ヨイヤ 臥牛の山に 響かせん

二上九段とゴルフ

52期 小泉 龍彦

二上九段は我等玄羊会の誇りである。戦中、戦後と我等玄羊会は函中に六年間座った。

その玄羊会に玄羊会の頭脳があり、顔があり、スターもいるが、同期全員がどこで誰に、聞かれても我等の自慢、誇りと一番に語れるのは二上達也兄である。

そこには彼の人の魅力が溢れているからである。

将棋の世界、日本将棋連盟の頂点に立った彼、本当にお芽出度う。まさに心、技、体の充実であり、たゆまざる努力の結晶にほかならない。

彼とは小学校(青柳)から一緒だったからか、又近くに住んでいることからかよく飲みにもゴルフにも出掛ける。飲むと必ずカラオケに廻り、とことんつき合う。酒は強いし乱れることは一度も出なかったことがない、実に爽やかな会話が何回何十回と続く。愉快そのものだ。「ナイスショット」も又然り、今春は伊那、夏は釧路と玄羊会面々と渡り歩いた。

基本に忠実、定石通り、将棋の技は知らないが、彼のゴルフは「堅実そのものだ」然しそのゴルフは常に攻撃的だ。伊那カントリーで右の林に入れたボールを横に出して、次を狙う作戦が堅いのにと考えられたのに、わずかな可能性を追い樹々の間を狙ってグリーンを改め成功させたり、釧路、風林CCでは殊の他、深いバンカーに入れたボールを脇に出して

ピンを攻める作戦より、むずかしいアゴをクリアーしてダイレクトにピンを狙う攻撃的作戦を敢行した彼の面目躍如たる

ところだ。無策な作戦と積極的攻撃的ゴルフとはおのずから違ふところだが、作戦が組立てられた時は果敢に攻めてくる。

優勝しても決して驕らず、不調に終わってもくさらず、昔々観た映画、ジョンウエインの「Quiet Man」(クワイートマン・静かなる男)を想い出す。

ゴルフはよく人間性そのまま「地」を出すと云われるが、本当に素晴らしい「静かなる男」である。

連盟の仕事はこれから大変なことでしょう。十分体に気をつけて頑張ってください。幸い楽しい家族と秀才のお子様立派な応援団がついています。小事にまどわされず、大事を掴え、仕事に遊びに邁進して下さい。

玄羊会の遊びが、ゆとりを与えられるなら幸せ、まだまだ一緒に向上の路を歩みましょう。



石川啄木

“お嬢さんを見つめて”

52期 加藤 和行

世の中には不思議な縁があるもので、二上のお嬢さんが、私の勤めているライオンに入社されたのは、二年前の春の事です。

二上素子さんは東大大学院で相関理化学を専攻された英才で配属部署は当然研究部でした。

私は営業部なのでお会いする機会は殆んどありませんでしたが、たまたま川崎工場のビヤナイター(工場毎に盛夏の夕にビールを傾け乍ら音楽を奏でたり、ゲームを楽しむお祭)で、始めてお目にかかりました。大変気さくに話し乍らも、芯の強い方と感じました。

工場長に聞いたのですが「現場実習でも常にグループのリーダーとして活躍していた」との事です。

しばし歓談を重ね、夜も更けてビヤナイターは二次会へと進み、会社のクラブに雪崩れ込みました。この時玄関で乱雑に脱ぎ捨てられた靴を一足ずつ揃えている女性がいます。私にはありませんか。その人が素子さんでした。私は家庭での躰の良さが無意識のうちに似たものと感心致しました。

その後お会いする事も無いままに打ち過ぎましたが、きっと立派な仕事をされているものと思います。二上の子育ての一面を見せて頂いた訳ですが、万事かくの如しと察せられます。

さて今後は門下生は勿論の事、将棋連

盟の頂点として、棋界を育成し、大きく発展される事を期待して止みません。



渡辺商店倉庫

二上に教わる

52期 中村 勝哉

二上に教わったといっても将棋ではない。歌謡曲でもゴルフでも、まして小唄でもない。

それは五年程前のことであった。玄羊会東京支部の世話人の一人であるA君が新規事業を始めるので、親しい仲間間で〇万円ずつ投資して応援しようと呼び掛けがB君からあった。

A君は男では珍しく母親のような優しく包容力のある人柄で、東京支部の要めになってきた人物だけに、B君の提案に誰もまったく異存はなかった。

ただ、〇〇万円という金額は当時の私が右から左に出せる金額ではなかった。そこで、A君の新規事業の将来性について私なりに少し調査してみた。その結果があまり芳しくなかったため、二上に相談の電話をした。私の話を聞いた彼は、即座に「そういう事は関係ないよ」とい

うのである。

私はハッとした。恥ずかしさに顔が火照ってくるのははっきりわかった。彼は最初から投資とは微塵も考えていなかったのである。

私にとって生きがいとは、一人でも多くの友に出会うことである。

それだけに、その大事な友とのつき合い方を教えてくれたあの電話を、私は終生忘れることができないであろう。



自然体の勝負士

|| 棋聖戦の裏話 ||

竹沢 崇

もう七年位になると思うが、二上九段と一週間、北海道でのゴルフとヨルソの旅をした事がある。

斜里に「一」という水産会社があり、その社長が二上の大ファンで、今回後援会をつくる事になった。

そこで私も一緒にどうかと誘われたのが、そもそものはじまりで、八日後には函館で棋聖戦があり、これに勝つと永久棋聖になる。その前にゴルフをやりながらリラックスして行こうという事になった。

ところが斜里に着いたとたん将棋のファンに囲まれ、おまけに後援会長のご息が素人五段で是非対局をお願いしたいという事になった。ご息は初めから終り迄カチカチになって気の毒で見えられなかった。もっとも将棋ファンにとっては神様の様な存在で、震え上るのも無理からぬ事である。

斜里で三日間、釧路で二日間、札幌で二日間とゴルフの転戦をしながら、夜は一杯飲みカラオケに挑戦。それだけで疲れるのに、行く所必ずファンがいてサイン攻めに合い、酔っぱらって書くのだから文字も印も乱れ、それを又ご丁寧に書き直すのだから大変だ。

出来れば私が代わってあげたいと思った位だ。七日目の夜、ようやく函館にたどり着いた時には、リラックスどころか、くたくたに疲れ果て疲労困憊の極地に達していた。

又、函館では今回の棋聖戦に是非共勝って貰おうと同期の連中が激励の宴を開いて待っていた。さすがにその夜は早々と引き上げ、二上には翌日一日ゆっくりと静養して貰う事にした。

私は翌日また大沼で函館の仲間とゴルフをやる事にした。ところがなんと休んでいる筈の二上が参加しているではないか。本人は「寝て

いてもつまらないし、やっぱり皆と一緒にプレーするのが楽しいから」という。さて、愈々棋聖戦が大沼大洋ホテルで始まった。相手は今上り坂の森雅二八段(当時)で頭を丸坊主にして精悍溢れる気魄で挑んできた。

何んとなくいやな予感がした。しかし前半も中盤を圧倒的に二上有利との情報が入ってきた。もう勝ちムードで祝福をあげはじめた。結果は逆転負けだった。急に疲れがどっと出て、なんとなく責任を感じた。

後で二上にその話をしたら「疲れがないと言えば嘘になるが、お陰で気分は上々、充分リラックスして良い将棋を指せた」と言う。

私は週一のペースを目標にゴルフを楽しんでいるが、同期の連中とは週二のペースで飲み歌う。決って最後まで残るのは二上と私で、翌日対局があるうが必ずつき合う。

飾らず恰好つけず常に自然体で戦う二上に敬意を表し、今後充分健康に留意され、経営能力を発揮されん事を祈る。



相馬株式会社

詰将棋

出題 二上達也

5	4	3	2	1	
			王	銀	一
		竜	銀	王	二
				王	三
				王	四
					五

持駒 角・歩 (9手詰め)

5	4	3	2	1	
		王	王	竜	一
		王			二
		香	馬		三
					四
					五

持駒 なし (3手詰め)

解答をお寄せ下さい。

二題正解者中三名 直筆扇面
一題だけ 三名 印刷扇面
以上呈賞

〔解答送り先〕

〒一〇六 東京都新宿区新宿一四一六
スペース販売(株)内
白楊ヶ丘同窓会東京支部

各期だより



◎第24期（大正11年卒）

前回の7名が3名に減じた。年齢が85・6歳だからやむを得ないことである。

なお、小生（和田貞一）は、大正10年春に四年修了で中学を退いた。
納谷三千男君（ペンネーム水谷準）も同じ。

斎藤達雄君は、大正10年夏の中等学校野球大会（於鳴尾球場）に出場した野球の名選手で、後に立教大学でリーディングヒッターになるなど大活躍した人、都市対抗の東京倶楽部でも有名だった。斎藤君は大正11年春の卒業。
水谷準君は、文壇のゴルフの名手として有名で、最近エージシューターを達成、84で回ったと聞いた。
斎藤君も自転車に乗って方々へ出かけているとのこと。
小生も週に一度はゴルフに出かけ、大いに叩いている。
まずまず元気であるというのが、3名の現況である。

（和田貞一記）

◎第34期（銀楊会）

私達の同期会は、別名『銀楊会』と称しており、ここ30年間毎年又は隔年ごとに集会を開いている。平成元年も同期生の生き残り67名の内、元気な者だけで東京大会を開く。

(一)期日 10月12・13日の二日間

(二)場所 伊豆・修善寺温泉

(三)参加人員 22名

内訳は、北海道地区12名

首都圏から10名

世話人代表 大原孫七

世話人 岩崎成章、五十嵐剛、木原芳男、来住重広明、鈴木良平、統一郎、徳田肇、伏見滋夫

（伏見滋夫記）

◎第35期（函八会）

我等同期会（函八会）は、本年6月9日、大塚の「神戸屋」で行われた。会員32名中、出席者12名、新潟県から佐々木君、奈良県から新田君も出席した。

まず、昨年3月逝去された松田一君に黙祷を捧げ、次いで宮本君から、昨年の「青函博」に合せて函館で行った「函八会」の様子が紹介された。

宴会に入ると互に懐かしい昔を語り合い、酔が回るにつれて、カラオケで歌ったりの楽しく明るい夜だった。

（及川広造記）

◎第46期（函中第46期会）

「函中第46期会」は、昭和14年4月函館中学校（現中部高校）に入学し、19年3月に卒業した同期の会である。

日中事変に始まり、太平洋戦争、終戦そして戦後と厳しい時代を生き抜いて来たつわものの集りでもある。

卒業以来今日まで5年を一つの節目とし、全国規模の同期会を開催してきた。

たまたま今年には卒業45年目に当り、去る6月17・18日、大沼湖畔近くの鹿部ロイヤルホテルに於いて一泊二日の記念大会を開催した。

全国各地から馳せ参じた同期生は一三〇名（夫人同伴の者もあり）還暦を既に過ぎた顔には、殆ど昔の面影はなく、昔年をとったことを痛感した。

行事内容を紹介すると

17日(出)・母校見学

・物故者慰霊祭（立待岬）

・貸切りバスで大野新道（強行遠足のコース）經由鹿部へ

・鹿部ロイヤルホテルで記念撮影、記念パーティー（一泊）

18日(日)・大沼周辺観光組とゴルフ組（鹿部カントリークラブ）に分かれ、それぞれ解放感を満喫。

時は恰も百花繚乱の季節、近くに聳える秀峰駒ヶ岳も新緑に萌え、久し振りに吸いこむ郷里の空気の匂いに、ふと青春の感覚が甦ったようである。

温泉にゆっくり浸かり、浴衣姿でくつろぎながら、近くの鹿部漁港に揚つた新鮮な海の幸に舌鼓を打ち、お互いの健康を祝しながら飲むビールの味は最高、まさにこの45周年こそ、終生忘れ得ぬ想い出であり、平成元年の幕明けに相応しい同期会であった。

これも函館本部の実行委員諸君のご尽力によるものと感謝している次第である。

◎第51期「あずまし会」

・函中51期どんじり会卒業40周年記念全国大会（函館）に参加
63年8月19日有志によるゴルフ
8月20日早坂茂三君の講演会（拓銀ビル大ホール）

物故者法要（信照寺）

ある。

高齢化社会の到来により、人生今や80年否90年といわれている。従って我々は、年をとったとはいえ未だ60代、若さを自覚し、健康に気をつけ、大いに長生きをして、同期生全員が元気で21世紀を迎えたいものと思っている。

◎第48期（東楊会）

去る5月20日、東楊会の平成元年の例会がJR磯子駅前「龍泉（ロンシャン）」宴会場において開催された。

来賓の水野、加納先生をはじめ在函同期生2名上河、半田君が元気な顔を見せてくれ、大いに会のムードを盛り上げるのに貢献した。今回は谷藤、本庄のヤンチャ幹事の差し金で、はじめて会場内にカラオケをセットしたり、夫人連の参加もあったりで、終始参加25名全員大ハッスルのまま終宴、校歌合唱の後、大半の連中が二次会場へタクシーを連ねて移動、夜の更けるのを忘れての交歓の一刻に酔いしれたのであった。

（本庄登志彦記）
東京白楊ヶ丘同窓会から「東楊会」とした。東楊会は、首都圏在住者の函中48期同窓会である。

（武田好司記）

総会、祝賀会（一乃松）

参加 高島、丹治、荒田、横田先生。札幌27名、函館39名、東京26名、夫人5名、合計一〇一名

なお、早坂君の厚意により講演会の純益から、40周年にちなんで金40万円を母校の「百周年記念事業関連基金」に第一号の寄付をした。

・「あずまし会」総会

元年4月19日番町グリーンパレス参加27名

卒業40周年記念大会の総括を行い、希望者に記念大会のビデオテープを紹介した。

(注)第51期は旧制中学の最後の卒業であることから「どんじり会」とし、その東京支部は、東京の「あずまし」と「あずましくやるべい」をかけた「あずまし会」としている。

(三国比左男記)

◎第60期（三三三会）

三三三会全国大集会開催

函中を卒業して早や30年を迎えた昨63年10月、函館において盛大な30周年記念全国集会在開催された。

2年程前から地元函館の虻川君、森君、川村さん他の幹事方と数回打合せを重ねて来たが、在函幹事の心のこもった世話で、実現することができた。

全国集会は、まず10月8日(出)の夕方、五島軒函館駅前店に全国から同期生が続々集合して開かれた。総数二二〇名、東京支部から37名が参加した。恩師の浜岡、豊岡、野田、黒沢(耕)、吉田の諸先生、30年振りの友達、懐しき一杯の集会は、二次会場共々、夜の更け

るのも忘れさせる大変楽しいものだった。

翌9日の朝は、想い出深い母校の教室において、恩師の5先生から記念講義をいただいたが、30年の月日が一遍に失せて、一同全くあの良き時代に戻った感があつた。

その後はバスで市内の名所めぐりを夕刻まで行った。好天にも恵まれ、本当に和やかで満たされた一日を過ごすことができた。

この感動は10ヶ月過ぎた今も鮮明に焼付いている。

お世話いただいた函館の幹事方はじめ札幌の幹事方にも改めてお礼を申し上げる次第である。

(内藤 尚記)

◎第63期（7年目の東京63期会）

昭和36年に第63期生として卒業以来28年、まさに熟年47歳を迎える面々は関東周辺に約百名在住。昭和58年の第7回同窓会に集った数人のメンバーが発起人となって、毎年一回開催で始めた同期会も、今年6月に第7回目を迎えた。年々盛会になり、45名前後が入れ替りて顔を見せ、今や札幌、函館、仙台、東京、京都の5ブロックに事務局を設け、それぞれの地域と交流している。充実した老年を迎えるためにも大事な会になってきたようである。

(小林嘉則記)

◎第65期（函中三八会）

今年の「函中三八会」は7月1日(出)午後6時から、東京・新宿のワシントン・ホテルの「三十三間堂」で行われた。

函中三八会には、北は青森から南は九州・熊本まで、全国一二五名いるが、この日の会には、その中から33名(男22名、女11名)が出席した。

会では、出席者に会員全員の住所録と欠席者からの近況報告を印刷して配布したほか、この日の会に初めて出席した押田寿郎、蠣崎広司、加藤恒明、川和(旧姓加藤)邦子、立石正和、千葉恵寿、村本東三の各氏と久々の出席の鎌田佳勝氏、さらにたまたま函館から仕事で来ていた宮田修氏から、近況報告をしていただいた。

とくに、今回は、長いこと住所が分からなくて連絡の取れなかった押田、加藤、立石、村本の四氏が出席、高校



卒業以来26年振りの顔を合わせる事が出来た。

この後、途中で遠くからの参加者の都合を考えて記念写真の撮影を行って、懇談になったが、それぞれがどう考えても覚えがないという顔でも、高校時代のクラスや部活、修学旅行などを思い出を話し合っ行ってうちに記憶が蘇り、会場のあちこちで会話が花が咲いていた。

午後9時過ぎ、会場の時間がなくなつたということで、次回の再会を期して閉会することにしたが、その後も皆別れがたく、会場を代えての二次会になつたが、名残は尽きないまま午後11時過ぎ散会した。

(菅原大作記)

◎第69期（火ばしら会東京支部）

平成元年4月15日、六本木のレストランにおいて、「函中69期火ばしら会東京支部」の集会を開催した。

昨年2月に続く4回目の会合である。これまでの平均出席数約40名。今回も一次会、二次会そして三次会とほぼ半数が最後まで残り、なお心残りながらも終電間際に「さようなら」をした次第。

それならば、いっそのこと温泉にでもつかって朝まで語り明かすのもいいではないかとの声もあるので、次回の企画が楽しみである。(吉田淑子記)

白楊ヶ丘同窓会を機に同期会が発足し、年々盛会ということは喜ばしい限りである。(編集部)

愛校心と野球に燃えた男

沼澤康一郎君逝く



「ヌマツチヨが死んだ！お通夜は二十一日……………」

「エッ！マサカ！」
回線の向かうから同じ驚きの声が返ってくる。（そうなんだ。電話している俺だって未だに信じられないんだ）

三月三十一日、朝4チャンネルの放映を終えて即入院した彼が、五月十八日に帰らぬ人になろうとは……………。

昭和二十年八月十五日、天下晴れて野球ができるようになった。翌年全道制覇して第28回全国中等学校優勝野球大会（西宮）に駒を進めた。その開会式が八月十五日。彼の誕生日が八月十五日。まさに野球の申し子のような彼。だが、彼は野球オンリーではなかった。小学校か

ら終戦までは剣道で腕を磨いた。戦中の勤労働員の赤川飛行場づくりでは、敗色濃く、とかく手抜きがちな我々を尻目に黙々と汗を流した。野球のことは他へ譲るが、駿足を買われて陸上競技百米の、また怪力を見込まれて相撲の対校戦に狩り出され、それぞれポイントを挙げた。高三の大運動会では華麗なマスケームの総指揮を立派にやり遂げ、表彰された。学業にも優れ早大（法）に一発で合格、下手なオルガンを弾き歌う文武両道の男だった。

昭和50年、彼が野球部OBに呼びかけて、母校野球部にバッティングマシンを寄贈した。母校80周年記念式典に野球部OB会が感謝状を戴いた。

学園祭で講演もした。
白楊ヶ丘にこれほど貢献した奴はいない。栄誉賞ものといっても過言でないだろう。

東京支部大会にはあまり出席していないが、函中卒業40周年記念誌に寄せた文（遺稿となっていました）からも彼の愛校心の深さが窺える。

遺稿、弔辞、仲間や後輩達の追悼文を載せたので、彼の人間像を偲び、冥福を祈っていたきたい。（M）

遺稿

夢は函中「日本一」

51期 沼澤康一郎

昭和24年、早稲田大学法学部入学、野球部四年間、8シーズンで五度優勝。28年毎日オリオンズ入団、35年大毎コーチ、45年から南海、49年からヤクルトコーチをし、各球団一度ずつ優勝、53年から評論家。プロ野球選手会・野球指導者講習会の専任講師、全国青少年の野球指導、現在NTV「朝6生情報」のスポーツ・キャスター。

どんじり会誌30、35周年記念号をあらためて見直した。各自それぞれの貫禄と老醜？のいりまじった姿を見ながら、タイム・マシンを40年前に戻し、中学時代のアルバムと比べてはニヤニヤしながら懐旧の思いに浸っている。寄稿文を読みながらアルバムを繰っては「ああ、彼奴だったか！」と甦ってくる思い出に、一人で悦にいつたりした。

同じ仲間（生徒）の話と別に先生方の一文も、渾名を思い出しては読んだが「三尺下って師の影を踏まず」で育っただけに（私だけでは無い筈だが……………）矢張り一人々に感謝したい。その中で豊岡先生が「数学に弱かっただけに苦手だった」私達の野球の試合をスコア・ブックにつけてくれた事は、非常に感動した。ちなみに甲子園大会・予選、市立中との決勝戦は7回表、市中が5点をとり9-5と逆転した後の雨でした。中断再開のあとその裏、我が函中は6点をあげ再逆転して道大会へ進んだものであった。

現在では高校野球の夢と希望の中心ともいえる「甲子園」だが、あの当時の私達はそんな大事を為し遂げた！という様な感じは全然なかった。終戦後一年、どうにか生きていた感じが強かったのに、とても野球どころではなかったのが本音。チームの形が出来て一週間後の予選なのだから「優勝して甲子園へ！！」等とはとても考えられなかった筈。それが相手にも恵まれた事もあって、幸運の女神は我が函中に栄光を与えてくれたようだ。

函中野球部の歴史のなかで過去、大正十年にも出場したらしいが、その時は一回戦敗退だけに、昭和二十一年の第28回大会の、函中ベスト8入りは少し自慢してよさそうだ。残念ながらその後中学五年、新制高三と予選で負けた為に二度目の甲子園行きは果たせなかった。あの仲間間で大学進学後野球を続けたのは少なく、ましてプロ野球というやくざな道へ進んだのは私だけだった。

とはいえ私は初めから野球を職業にしようとは思ってもいなかった。母の強い希望でもあり、弁護士志望で早大進学をした。早大卒業後の毎日オリオンズ入団も、3年間ユニホームを着たらその後記者に採用となっていた。それが、私自身の都合？―捕手に転向したことから投手を育てる喜びに夢中になり、3年間の予定が9年に延びてしまい、毎日新聞社からスポーツ紙に変更し、現在に至ってしまった。

家族や友人には心配させたり苦労をかけたなとは思っているものの、後悔はしていない。それよりも人を育てる喜びで、いまなお夢が一杯だ。現在、プロ野球選手会

沼っちょの思い出

51期 納代 正信

の指導者講習会の講師として全国を歩きながら、子供達に野球の指導を続けている。高校野球の強いチームなどを見るにつけ、北海道の高校野球が全国一にならないのは残念でたまらない。もし雪のハッピーがあると考えている人がいたら、まず即座に改めてほしい。正しい指導をすれば、全国一は決して夢ではない。

私はノンプロ、大学へ教えるにいき、自分のチームの小・中学生にも野球指導をしている。プロで活躍できる素質があるかどうかとなると難しいが、高校生までは合理的な練習をすれば、ぐんぐん実力はつく。私の息子が高校野球部在籍中に2年間「プロ・アマ問題で表面的にはいけないが、目立たない所で教えた。選手20人のうち高校生になって始めた子が15人もいたのに、埼玉県の西部地区で決勝戦に迄進んだものだ。」

自慢する様だが、子供の心と身体のことを知り、そのチームの個性を生かした練習をすれば、3年間で強いチームに変わる筈。

いまなお函中でやれることは、夢で終わらなくないと祈念している!!



昭和五年生まれの人生にしては一寸はかないものを感じて『残念』の一語に尽きる。

函館の弁天町に生まれ、小学校を一緒に通った一人として幼少の頃の沼っちょ、思い出は50年前の事になる。海岸が近いので小サバ、イワシ等の釣、倉庫先での隠れんぼ、広い倉庫内での三角ベースによるテニスボールのゴロベス?、冬になると山大神宮の急坂のそり滑り、沼っちょはいつもニコニコして友人の先頭になり、新しい遊びを作って人気者だった。今と違って遊び道具に恵まれない時代に育った我々は、『自然』と言う何より恵まれた環境を利用(?)した事が今思えば幸福だった様な気がする。

小学校では隣の組だったが、何かその頃から人生を野球にかけた沼っちょらしさが窺えた。

戦時中であつた為か剣道、柔道は勿論やつたが特に足腰の強かつた沼っちょは相撲の選手として代表になり、学校別対抗戦には先峰として大活躍、神社のお祭り相撲大会等には随分賞品のお裾分けに与つた事も思い出される。

函館山の裾野(山大神宮のうら山)では、雪が降ると斜面にコースを作り、登っては滑り、登っては滑りのくり返して一日過ごした事もあつた。スキーについては、同クラスの小平君にはとてもかなわぬ技であつたが、レース用の細いス

キーで直滑降は得意の一つであつた。遊ぶ事ばかりの思い出だが、勉強の方も勿論秀れていた。西堀君が級長で一年から六年まで学校始まって以来の超秀才が同クラスだったので、二番手で甘んじた(?)事も多かつた。

よく出来た家庭に育つた事も沼っちょの人生を大きく扱げた要因の一つだつたと思うが、今は亡き父、そして母、又今何かと家族の方々を面倒みていただいているお姉さんには、『餓鬼』の頃から我々一同お世話になつた事も思い出され感謝の気持ちで一杯である。

昔の思い出ばかりで笑う方もおられるかも知れないが、『沼っちょ』どうぞ安らかに——。



先輩沼沢康一郎氏を偲んで

52期 小泉 龍彦

昭和二十年五月、函中二年生の時だつた。この年が最後の体力章検定になるうとは知る由もなく、二、三年生がグラウンドで「手榴弾投」を受験した。この時その手榴弾投をいとも軽々と吾々の二倍も投げる三年生が居た。「すげえなあ!」と見とれた。

これが誰であろう沼沢先輩の第一印象だつた。戦争末期、ガッチリした体躯だが、丸顔の坊チャンタイプ、その顔はニコニコと微笑んで、戦争の悲惨さなどそのカケラも感じられなかつた。

それから五ヶ月後、終戦を境にスポーツが平和と共に戻り、野球部が三年振りかで復活した。久しぶりのグラウンドにピッチャーマウンドをつくる。モッコを背負い、土を運び砂を入れたのは寒い霜の降りた日の放課後だつた。かろうじて革のグラブ、スパイク代わりの高丈、革ボールは確かオーシャンクラブからのお下りを、下級生が縫い直したものだつた。

この時から沼沢先輩は、もう野球部の重鎮的存在となり、プレーの力はもとより、折衝力にも才長けて、文武両道に秀でた逸材だつた。

先輩が大町方面、私が末広町だつたので、帰りは良く一緒になつた。「小泉、お前精力あるか、全精力を野球にぶつければ!俺は野球に全精力を注ぎ込んでるんだ。これから一生ズーッと頑張るんだ」と当時のコワイコワイ存在だつた先輩の数少ない会話の良く言われた言葉でした。

今日この事を考えて見るに、先輩は「全精力」とは、「うちに根性、おもてに技術」と私に教えられたのだと思う。「技術を磨くと同時に、負けてたまるか、忍耐強い精神力を持って」と語ってくれたものだったんだらうと頭が下る思いで一杯である。

函中のエース兼ファースト、そして四番のスラッガー。

早稲田では強肩駿足の一番レフト。プロではインサイドワークに鋭い切れをもつたキャッチャー。常に全力をぶつつけた現役時代のハッスルプレイ。そして後進指導、ヘッドコーチ。とそ

に根性、おもてに技術」が、中学高校時代語ってくれた先輩の、活きに粋き歩んだ五十数年だったのではないだろうか。

闘病最後の日、ベッドでテレビを見、村田投手二百勝達成に「ヨカッタ、ヨカッタ」と口ずさみ、村田投手を称え、その精神力、忍耐力をご子息に話したと聞き、野球人沼沢先輩の面目躍如と目頭を熱くしたのは私だけではないだろう。

吾等のアコガレ沼沢康一郎大先輩。有難うございました。函中野球部史に残る二度の甲子園（大正は鳴尾、戦後は西宮球場）その一度の金字塔を打ち建てて下さった先輩、その誇りは永遠に永遠に輝きを放っています。

沼沢先輩安らかに………そしていつまでも後輩を見守って下さい。



心の支え

沼沢先輩の思い出

54期 斎藤 弘孝

思えば昨年七月、我が母校函館中部高校野球部が、十数年振りに道大会に出場することになった時に、先輩と電話でお話したのが最後とは、何と果敢ない人生なんだろう。

さて、昭和二十七年、私が大学に入学した年ですが、先輩は早稲田のレギュラーとして活躍しておりました。神宮球場では、試合開始に先立ち、ウグイス嬢によるスターティングメンバーの紹介があり

弔辞

「プレートの前のバッティング!!」突然ヌマッコが怒鳴った。昭和二十二年夏の大会に備えて合宿中の彼の寢言であった。

ご遺族のお話によると、死の直前、混濁の中での彼は、モーニングズの監督としてブロックサインを出し、選手の活躍に拍手を送り、その勝利に酔い、帽子ならぬ頭の上の水囊をとって丁寧試合終了の挨拶をしたという。また、十周年記念大会のオールスターのメンバー表を書くからと言って、差し出そうとした紙を待ちきれず目の前のタオルに書き始めたとのこと。このようにヌマッコの人生は野球一色だった。

我々が物心ついた時は函館太平洋の全盛時代であり、久慈次郎さんは神様だった。小学校時代からボールに親しみ、函館中学時代は戦争中で野球が排除されていたけれども、勤労働員の休み時間は手作りのボールやバットで野球に興じていたものである。

終戦になって早速野球部が復活し、昭和二十一年には北海道代表として第二十

八回全国中等学校優勝野球大会に駒を進めた。ヌマッコは中学四年生ながら予選、大会を通じファースト四番打者として大活躍したことは今更申すまでもない。ヌマッコは学業も優れていたが、当時から野球理論や球界事情に精通し、飛田徳洲先生や伊丹安広氏の本を読み、新田恭一氏のバッティング理論を研究し実践するという理論家の片鱗をみせていた。

昭和四十五年暮の事故の時、我々は真剣に葬儀の心配をしたが、二週間もの意識不明の後奇跡的に回復、春のオープン戦に早くもヌマッコの雄姿を見ることができた。

我々には不死身のヌマッコだった。それなのに今度は僅か四十九日で幽明境を異にするとは………

また、ヌマッコはルウゲーリックに憧れ、背番号制度はなかったが、部員で持番号をつけることにして、ユニホームの袖に四番をつけていた。行動のはしはしにもルウゲーリックの雰囲気があったように思う。

久慈次郎さんの母校、念願の早稲田大学の野球部に入部、野球への道は続くのであるが、レギュラーになった時は我々も感激したものである。

早稲田からプロへ進むと聞いた時、我々は疑問に思ったが、ヌマッコは、ノンプロがプロまがいの勧誘をするので割り切ったと語っていた。また、プロでもフロントに迎合することは潔しとしなかったという。ここにヌマッコの一徹さが窺える。

ヌマッコが手塩にかけた子供達は全国に育っており、来るべきバルセロナオリンピックで活躍する者も出てくることであろう。ヌマッコの教えは全国津々浦々、否ソ連からヨーロッパへと広がり、花を咲かせていくことと思う。

どうぞ安らかにお休み下さい。そして野球の限らない発展を見守って下さい。

平成元年五月二十二日
函中野球部・友人代表
51期 西村源太郎

ですが、その時六番レフト沼沢（函館中部高校）とアナウンスされると、私の同僚から「お、斎藤の先輩か」と言われ、随分鼻を高くした記憶が今も鮮明に浮かんできます。

あの年を最後に、もう函館中部高校の名前を神宮球場で聞くことはないのでは

ないか、と想ったりしております。

また、試合前に二言三言先輩と取り交わした会話が、私にとってどれ程励みになったことか。

そのご恩を何一つお返しすることの出来なかつた自分の至らなさを、今になって後悔しております。

(明大野球部OB)



会員短信

いつもながら、会費払込票の近況、通信欄で短信をいただいております。どうもありがとうございます。

昭和六十三年度分から抜すいさせていただきます。

(大15年卒野崎龍蔵) 再々病気はしましたが、元気になりました。毎日が楽しいです。同級の皆様のご多幸を祈ってやみません。百才まで生きるつもり、ボケないで。(昭7年卒大原孫七) 昨年に続いて函館で同期会が開かれました。七十余才のオジン達が昔にかえって楽しく遊んできました。帰ってきて、老人会でなるとか江差追分のマネをしたいと努力するのですが、「江差言訳」に終わるのが恥しくかつ残念です。(昭7年卒三上茂) 脳梗塞全快、リハビリ完了。目下、体育館に週二度通って、体育トレーナーの指導で体力をつけるのに努めています。(昭8年卒徳繁正直) 日頃はお世話になっております。会員の皆様、健康第一にお過ごし下さい。当方病氣療養中で、快方に向ってがんばっております。白楊日よりありがとうございます。(昭9年卒佐々木八郎) 年と共にものあわれを感じます。一人一人が心の灯をかかげ、次代への道を照らしたいものです。(昭9年卒秋浜晴彦) 同期会「九昭会」の在京有志が中野駅前の大衆酒場「白木屋」に、毎月9日午後6時から顔を合せることになっています。既に一年余りとなる。(昭10年卒山本弘志) 53年3月鉄道病院退職後、齒科開業医として働いております。(昭

12年卒新哲二郎) ソ連に出張中にいつも失礼していますが、あしからず。(昭13年卒山本安二) よんまる会に参加し、時折北海道の香を味わっています。関西には同年の人も少なく淋しいですが、京都野鳥の会会員で、東南アジアから韓国と遊んでいます。(昭16年卒阿部海三郎) 長男(二七才) 長女(二四才) と三人で暮しています。飲み過ぎないようにと、子供達に見張られております。(昭17年卒浦田常治) 天使の輪なげ一月二日NHKラジオ第二より放送、小さな部屋 九月十三日第一生命ホール 新しい日本の歌発表会参加、希望の泉 教育出版より出版、ガラスの蝶々 世界合唱祭リングブックに掲載。(昭17年卒高倉隆) 少年老い易く学成り難しとか。函中卒業以来はや四〇数年余、全くあつという間でした。諸賢のご健勝を祈念してやみません。小生お蔭様で元気でおります。(昭18年卒佐藤誠悦) 卒後住所不明のまま経過。62年2月同期会東京支部に44年振り、63年9月函館にて同期会45年振りで再会感激。お互の風貌の激変にしばしためらい、感慨一しお。幹事曰く、「死亡欄か不明欄に入れるかで毎年迷っておった」由。以下略。(昭19年卒押野幸雄) 今春体調を崩して現役引退、目下療養中です。医者が禁酒を宣告しなかったのを幸いに、僅かばかりの晩酌を楽しみ、「玄冥の北の一道」を独吟しております。(昭25年卒菊池昶史) ヒマを見つけて野鳥観察をしています。11月初め水戸の近くに、アネハツルとオオフラミンゴが飛んできました。何か良いことがあります。 (昭26年卒田中英樹) 63年3月札幌に単身赴任。札幌在住の函中及び東・西に分

かれた連中が機会ある毎に集まり、大変懐しく、また頼もしく感じています。(昭28年卒滝沢滋子) 同窓会に出席出来ず残念でした。私事はおかげ様で元気にやっております。皆様によるしく。(昭33年卒乙山誠司) 同窓会東京支部があるのが今回初めて知りました。これも30年目で同期会に初参加ができたお蔭と感謝しております。63年まで行方不明の一人より。(昭33年卒伊藤紀子) なかなか同窓会には出席できないでおりますが、在学していた3年間は、青春の原点として今も心を和ませてくれます。東京白楊だよりは、私を故郷へ、若かった頃へとタイムスリップさせてくれる大事なキイの働きをしてくれそうです。(昭33年卒筧川浩一) 年に一度函館に行っています。本年の青函トンネル開通で大変便利になりましたが、連絡船が無くなって、寂しくなり時々船旅を思い出しています。(昭34年卒嶋義生) 今年より皆様方のお仲間に入れていただきます。東京へは40年5月から出ておりましたが、連絡がつかずに(住所が変わった等) 残念でした。以下略。(昭35年卒須山慶子) 現在三鷹市牟礼にある高山小学校に勤務。高二の女の子と中三の男の子の母です。高校で始めた卓球を今もやっています。(昭36年卒小林嘉則) 東京の63期会も第6回目となり、函館より加藤正之、渡辺英郎先生、東京在住の吉田信一先生をお迎えして50名の会を催しました。(昭38年卒千葉恵寿) 北海道より転勤(希望)で東京に来てはや2年、JR東日本山手電車区に勤務しております。今後は北海道で習得したスキー技術を生かして、冬のリゾート開発室へ参画したいと思っています。(昭38

年卒東樹亨) 母校の同窓会からの連絡、毎回毎回女房はうらやましく思っています。さすが我が母校。でも、何もしてやれなくて申し訳ありません。出席もできず残念。(昭41年卒田中恵子) 専業主婦ですが、週のうち一日だけは茶道教授として小学生を指導しています。昔日の自分自身の不勉強さを棚に上げ、目下悪戦苦闘中(?)です。(昭42年卒上平清美) 以前横浜に居た時は支部の存在を知りませんでした。その後、また横浜に来た昨年秋に会の案内を手にし、ちょっとびっくり……でした。好奇心で大会に参加しようと思いましたが、平日で遠方でPM6時からと三拍子揃っており、更に夫の不在となれば望みはかなわずです。次回は土曜のPM4時頃の開催を期待しております。(昭42年卒安藤秋子) 主人の二度にわたる海外勤務のため、いつも会費未納の幽霊会員で申し訳ありません。今回、帰国してまだ一ヶ月ですのに、白楊だよりをお送り頂き、懐しいやら嬉しいやら……。どうもありがとうございます。(昭44年卒片岡進) 基本的にはフリーのイベントプロモーターをしていますが、現在は昭和女子大学のオープン・カレッジ・プロジェクトに加わって、フルタイムで働いています。3年程度はこの状態が続く見込みです。(昭47年卒保浦眞一) 本年恥かしながら、35才にして結婚の予定です。来年は帰国し、勤務医としてやっていくつもりです。(昭47年卒岡田康明) 10月に次女が誕生致しました。(昭48年卒松本修一) 同期の消息が今一はっきりしないのが残念です。できれば同期会でもやりたいものです。今後の発展を祈ります。



石政祐三君は、函中から東大第一工学部を昭和二十二年卒業後直ちに東京瓦斯(株)に入社、昭和六十一年まで約四十年間一貫して液化天然ガス(LPG)関連技術の開発育成に努めてきましたが、なかでもLPG地下式貯槽の開発は特筆に値するといわれています。
現在、東京冷熱産業(株)代表取締役会長として活躍中であります。

石政 祐三
佐々木 貞光
西君(四十三期)

藍綬褒章受章の榮譽に浴す

佐々木貞光君は、昭和十六年函中卒業後(株)日立製作所に入社、終戦後日東電気工業(株)に入社、現在同社(日東電工(株)と改称)取締役副社長として活躍していますが、この間一貫して感圧性接着剤および接着テープ技術の近代化に努め、今日この分野に関する技術の基礎を築いてきたものであります。(43期 井筒吉彦記)



平成元年「第13回親睦大会」の日程決まる!!

新しい年号に変わり、初めての集い、若い期の方の参加を期待しています。

- ・とき 平成元年10月25日(水) 午後4:30~6:30
講演 終わりの始まり<素人時代の幕明け>
早坂茂三氏
懇親会 午後6:30~9:00
- ・ところ 「東京青山会館」地下鉄表参道下車
- ・会費 7,000円

会費納入のお願い

当支部の運営は、年会費によってその殆どが賄われておりますが、その納入状況が芳しくありません。
会員各位のご理解を賜り、会報に挿入してあります『振替用紙』によって年会費をお振込みいただきたくお願い申し上げます。

名簿作成について

同窓会の一番大事な事は、組織づくりであります。年々新会員が増えていますが、その把握が難しく、苦慮しております。

この度、平成2年上半期完成を目的に名簿を作成し、組織がためをすることに、先般各評議員に名簿原稿の送付方をお願いしたところで、

現在のところ送付のあったのは、次の期だけとなっております。

お忙しいこととは思いますが、何卒ご協力下さるようお願いいたします。

- 24期、30期、31期、32期、34期
- 35期、39期、42期、43期、44期
- 46期、47期、48期、51期、52期
- 53期、60期、63期、65期、

(名簿送付先)

〒115 東京都港区虎ノ門3-1-3

陽光商事株式会社内

三國 比左男

編集後記

平成元年から編集担当者が代わりました。スタートしたのが7月7日の評議員会後ということで慌しい編集となりました。

率直なご批判、ご意見をお寄せ下さい。(T)

富田先輩から玉稿をいただき感激しました。

先輩は、函中時代の昭和11年に柏野において天皇陛下のご親閲を拝受されております。当時直接お仕えすることになるなど夢想もしなかったことでしょう。

将棋の二上氏、野球の沼沢氏を記事として載せました。同世代のお二人ですが、真対称の生き方をされたと思います。

将棋だけが人生でないと思いにゴルフに友との付き合い良く、自然体で自己陶冶する二上氏。

最後まで野球理論をウワ言にまで言い続け、野球一筋に生きた沼沢氏。

形は違っても素晴らしいお二人の人生哲学に心から敬意を表し、沼沢氏のご冥福をお祈りいたします。(F)

計報

当支部顧問 佐瀬順夫氏(28期・大正15年卒)7月4日急逝されました。

7月7日の評議員会にご出席のご返事をいただいていただけに残念でなりません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

発行 白楊ヶ丘同窓会東京支部

編集責任者 高橋 良一

支部事務所 新宿区新宿一-141-6

〒160 (御苑ビル)

スペース販売(株)

TEL (三五二) 六一八一